

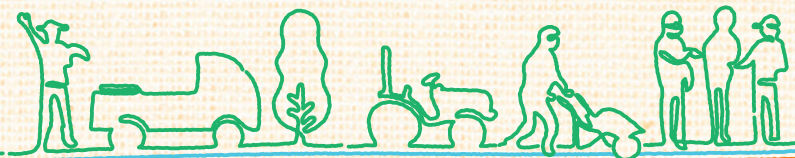
畜産生産部
×
飼料畜産中央研究所

主な
事業内容

- 畜産経営を支える生産技術の開発や普及
- 配合飼料や畜産資材などの商品の実用化

食卓に欠かせない鶏卵。「物価の優等生」として家計を支える裏で、生産者は昔から大量の鶏ふん処理に悩まされてきました。JA全農 飼料畜産中央研究所の養鶏研究室は、生産者

負担軽減のため、「鶏ふん低減飼料」を開発。産卵成績を維持しながら鶏ふんを2割減らすことができるとあって全国に広がっています。同研究室に開発の経緯や効果をお聞きました。



「鶏ふん低減飼料」で生産者負担軽減

現場の課題解決へ

研究重ね、新商品開発

Q 開発のきっかけは？

国内で発生する鶏ふんは年間800万トンに上ります。良質な堆肥になる一方で、供給量が多く余りがちで、においやハエなどの環境問題にもつながり、長年生産者の悩みの種となってきました。生産者を訪れる度に余っている山積みになった堆肥を見て、なんとかしたいと思ったのがきっかけで、研究所として2004年から研究をスタート。試行錯誤で技術を磨き、2017年にはJA全農北日本くみあい飼料(株)と連携して野外試験を実施。期待通りの効果が得られたため、2018年に「くみあいUNKシリーズ」として商品化しました。

Q これまでの飼料との違いは？

飼料の消化を良くするため、鶏が消化の苦手な繊維質を減らし、消化の良い原料を優先的に配合したのが特徴です。さらに、繊維質の分解を助ける酵素を添加し、より飼料栄養の消化・吸収をサポートできるように設計しました。

その結果、産卵成績を維持しながら、ふんの量を2〜3割減らすことが可能となりました。また、腸内の繊維質が減ったことで飲水量が抑えられ、ふんに含まれる水分量も減少。より乾燥した状態になることで、発酵が進みやすくなって堆肥化にかかる時間が短縮さ



開発した鶏ふん低減飼料

飼料畜産中央研究所
養鶏研究室 室長

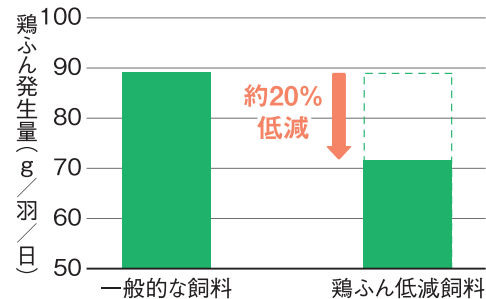
桑原 徹平さん

2004年入会。餌の性能の向上やコスト削減に向けた研究開発、JA全農たまご(株)と連携した技術開発などを担当。これまでJA東日本くみあい飼料(株)などに出向し、生産者の声を聞いてきた経験から、現場のニーズに即した研究を行う。



れたり、卵にふんが付着する汚卵が減るなど、さまざまな効果が期待できます。

生産現場における鶏ふん低減飼料の効果



Q 生産者からの反響は？

生産者からはふんの量が減っただけでなく、運搬するトラックの燃料費を抑えることができた、コンポストの稼働時間が短くなったなどの声をいただいています。価格は従来の飼料よりも上がりますが、それ以上の効果を実感していただいております。最初に販売を開始した北日本エリアから、現在は西日本エリアでも広く使用されています。助かっているとの生産者からの声が本当のように、現場の役に立っているという実感が研究開発の大きなモチベーションになっています。

Q 今後の展望は？

より消化性の良い原料を使ったり、独自技術を試したりし、さらに効果を高めるための研究を行っています。また、現在の最も大きな課題は飼料原料の高騰です。効果の向上とともに、少しでもコストを抑えられるような新しい技術を模索し、より安価に提供できるように引き続き研究を進めてまいります。